

「連関」の破綻がひらくデザインの地平 ー邦楽器の危機と職人の作家化ー

前崎信也

概要

三味線・箏・尺八に代表される邦楽器生産は、演奏人口の減少や外国産素材の高騰、職人の高齢化が進み、国内の工芸の中で最も継続が困難な分野のひとつである。古典芸能や祭祀祭礼の音を奏でる道具の喪失は、邦楽自体の存続に直結する死活問題だといえる。本発表では、この危機的な現況を単なる伝統産業の衰退として捉えるのではなく、デザインと「連関」の視点から再考する。高度な分業体制の崩壊は、皮肉にも生き残った製作者に全工程の一貫生産を促し、職人の「作家化」の可能性をひらき、新たな創造性を生み出しつつある。既存の生産体制や商習慣の危機を検証し、道具と表現の切実な関係性から邦楽器の未来を模索する。

略歴



立命館大学デザイン・アート学部/研究科教授。滋賀県甲賀市出身。龍谷大学文学部史学科卒業後に英国に留学。PhD in History of Art（ロンドン大学）。専門は近現代美術史・工芸文化史・デジタルアーカイブ。学術研究に留まらず、美術展覧会の監修、アート・イベントのプロデュース、音楽アーティストのコラボレーション等、多岐にわたる活動を行う。著書・論文多数。